

# 「三分割された御後絵」の王は誰か

永津 禎三

2024年3月15日に驚くべきニュースが報じられた。

戦時中に沖縄から流出した文化財がアメリカで発見され、14日に返還されたというニュースである。

返還された盗難文化財の中には、御後絵が含まれていた。第13代尚敬王、第18代尚育王のほか、「尚清様」と軸に墨書された一点、そして、三分割されたと思われる一点の合計4点の御後絵である。

知事の15日定例記者会見で発表されたこのニュースは、すぐにネットニュースとして報じられ、翌16日、沖縄の新聞二紙のトップを飾った。

## 緊急鼎談〈返還された御後絵をめぐる〉開催へ



「琉球美、造形研究会」には御後絵研究30年を超える会員、佐藤文彦さんがいらっしゃる。

2022年12月18日と2023年2月19日の第8回、第9回定例研究会では「御後絵（うぐい）と肉理紋（ユンニムン）」の発表をいただいていた。

「御後絵返還」のニュースで、真っ先に考えたのが、研究会として佐藤さんのお話を伺いたいということだった。

3日後の18日には、次のようなメールを佐藤さんに送った。

3月15日の夜、Googleを眺めていたら、NHKの「琉球国王の肖像画、沖縄県に引き渡し」のニュースが目に入ってきて驚きました。

テレビでは玉城知事の会見がお昼頃には行われていたのでしょうか？

翌日16日の琉球新報で佐藤さんのコメントも拝見しました。

特に第18代尚育王の御後絵が、金箔の多用や、朱と緑青を主体とした強い色彩でありながら実に上品なものであったのに驚きました。

平川信幸『琉球国王の肖像画「御後絵」とその展開』が2月に出版され、そこに「沖芸大・東文研共同研究」の鎌倉芳太郎ガラス乾板からの詳細デジタル画像を確認し、佐藤さんの見解をまた改めて伺いたいと思っていた矢先でした。

「沖縄県教育庁文化財課」提供の画像を見るだけでも、多くの疑問が湧き出してきました。

このタイミングで、佐藤さんに再び、「琉球美、造形研究会」定例研究会でご発表いただけませんか？

例えば、タイトルとして「返還された御後絵をめぐる」などで…。

会員の皆さんが佐藤さんに伺いたいことがフツフツと湧き上がっていることであろうと推察しています。

ご連絡お待ちしております。

まだ、情報が限られる中、それでも県の対応が固まってしまううちに研究者としての要望もいち早く伝えたいということで、4月1日に緊急鼎談として開催することを決定し、24日、次のように会員に広報した。

## 緊急鼎談〈返還された御後絵をめぐる〉

日時：2024年4月1日（月）18時～20時

会場：琉球大学教育学部538室（オンラインでの参加も可能です）

「御後絵 米から返還！」3月15日に歴史的な朗報がありました。

Web上や翌日の新聞紙上に掲載された第13代尚敬王、第18代尚育王の画像はかなり鮮明です。

これまで鎌倉芳太郎の白黒写真では分からなかった、朱や緑青を基調とした色彩や金箔の多用には驚かされました。

「琉球美、造形研究会」では、〈緊急鼎談：返還された御後絵をめぐって〉を開催いたします。

佐藤文彦（御後絵研究30年超）、池宮城友子（日本画家）、前田比呂也（元沖縄県立博物館・美術館副館長）の本研究会会員3名に語り合ってください。

司会を務めることになったため、私は、情報を共有すべく、緊急鼎談開催時までには報道された記事や番組を整理し、発表者に送付した。その中でも、FBIが提供するYouTube情報は最も鮮明な画像を提供していた。

#### Art Crime Team

FBI Boston Recovers and Returns 22 Historic Artifacts to Okinawa, Japan



<https://www.fbi.gov/news/stories/fbi-boston-recovers-and-returns-22-historic-artifacts-to-okinawa-japan>

このFBI提供の動画は、緊急鼎談でも上映し紹介した。また、配布資料として以下のものを作成した。

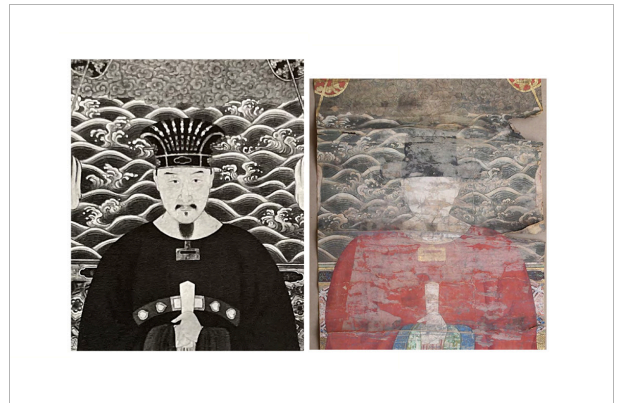
■盗難美術品リストの品がなぜ遺品に？ FBIが返還に尽力した琉球王国の宝「御後絵」 令和の大発見に大興奮【沖縄発】

(FNNプライムオンラインより)



■第8代尚豊王御後絵か？ 全図

■第8代尚豊王御後絵か？ 烏紗帽の人物



■尚王家系図



この中で、「第8代尚豊王御後絵か？ 全図」については、佐藤さんの資料を解像度の良い写真に置き換えただけの資料である。

御後絵についての発表を私が打診したすぐ後、佐藤さんは3月19日のメールに、第8代尚豊王御後絵（鎌倉芳太郎撮影白黒写真）と新聞報道の三分割の画像を組み合わせ、構図が一致する写真を送って下さっていた。

そこには「13代尚敬、18代尚育をはじめ、分割されていた8代尚豊（かと存じます※添付写真）の色彩は、新発見と見られる4代尚清と併せて、今後の御後絵研究への大きな扉が開いた感覚です」と記されてあった。

そして、その後、文化財課の濱地龍麿氏へ電話した際、「これは第八代尚豊ではありません。烏紗帽を冠っています」と告げられたと語っていらっしゃった。

私としては、烏紗帽を冠っている状態に現在なっているから、これが尚豊王御後絵ではないと断定するのは早計であると考えた。顔の部分が消されたようにも見え、盗まれた後、切断され、かなり手を入れられていて、王冠を烏紗帽に描き変えられた可能性も否定できないと考えた。

何より、鎌倉芳太郎が撮影した尚豊王御後絵とピッタリと重なる構図であることで、尚豊王御後絵に手を入れられたものかもしれないと思わざるを得なかった。肩のあたりのシルエットが異なるのも後に手が入ればこうなることあるのではないかと思った。

ただし、「第8代尚豊王御後絵か？ 烏紗帽の人物」の資料を作りながら、国王の背後の波の形状が微妙に異なることに気付いた。とすればやはり尚豊王御後絵ではないのか。

烏紗帽が改変されたものではなく、もともとこのように描かれていた御後絵であったなら、この国王は誰なのか。

殆ど同じ構図で描かれているので、尚豊王の次の国王である尚賢王であるかもしれない。尚賢王は早くに亡くなり在位が1641-1647年と短い。早急に御後絵を制作しなければならない状況になり、ほぼ前王の構図を借り、国王像だけを変えたのではないかという推論もまた、緊急鼎談で話し合ったように、成り立つかもしれない。家臣団が全く変わることもなく…。

三分割された御後絵は他のものに比べてかなり小さいという情報だけで、正確な寸法は公表されていないこともあり、やはり、まだまだ謎のままだった。

緊急鼎談〈返還された御後絵をめぐる〉では、多岐にわたる感想や発言が述べられた。その中でも、「これらの返還された御後絵が重要文化財指定を受けると、沖縄の人が保全・修復に関われなくなる恐れもある。如何に自分たちの文化を自分たちで再生させられるかという部分が困難でもあり課題で重要」という発言が一つの核心であろうと思う。

録画は4部に分かれ、総時間数2時間にもなるが、是非全編を通してご覧いただきたい。



<https://www.ryukyubiken.com/%E7%B7%8A%E6%80%A5%E9%BC%8E%E8%AB%87>

その他、金箔がこれほど多用されていることに皆が驚きを隠せなかった。

ただし、この緊急鼎談開催のこの時点までは、学習のための時間も短く。私としては、鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』と平川信幸『琉球国王の肖像画「御後絵」とその展開』を拾い読みするのがやっとだった。

御後絵が目の前に現れたことで、初めて実感を伴って、鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』を読み直せるのではないかと考えた。

## 尚王家家系図に御後絵の情報をまとめてみた

緊急鼎談を終え、いろいろな疑問について考察する前提として、まずは分かりやすい一覧的な資料を作るのが、今後考察を続けるために良いのではないかと考えた。鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』と平川信幸『琉球国王の肖像画「御後絵」とその展開』から御後絵の基本情報を抜き出して、緊急鼎談で準備した「尚王家家系図」にそれを書き加えてみることにした。

基本資料として、鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』にある各御後絵の作者と制作年がある。ここで問題となるのが、鎌倉は自分が写真に収めたものはお扣であると思込んでいることである。

家譜などを元に、各国王の御後絵の作者と制作年を丹念に調べ上げてあるので、この情報は踏襲することにした。

平川信幸『琉球国王の肖像画「御後絵」とその展開』には、「真境名安興、比嘉朝健の調査」が載っており、それによれば、彼らは1925年10月2日に中城御殿で調査を行っている。

この時、彼らは軸物（縦巻き）の御後絵は見ることができなかった。軸物の大きさは横7尺（212.0cm）、縦8尺（242.4cm）。

見たのは、お扣の大小三通りの巻物（横巻き）で、大は高さ3尺（90.9cm）、長さ7間（1274cm）。国王の等身大の半身像と全身像を描いたものの二種類。小は高さ2尺5寸（75.75cm）、長さ5間余り（910cm）全身像とある。

平川は「真境名や比嘉が閲覧できなかった軸物は『遺宝』のものと同じであることが確認出来る」としており、この考えは信頼できる。

つまり、鎌倉が撮影したものこそ、お扣などではなく、軸物（縦巻き）の御後絵そのものである。

鎌倉は1982年『沖縄文化の遺宝』出版にあたり、真境名や比嘉の調査報告を知っていたはずであるが、何故、撮影したものをお扣と思い込んでいたのだろうか。

金箔に関しても、鎌倉の記述は曖昧と言える。『遺宝』の十三代尚敬王御後絵の解説には、「本図は金色燦然たる壁面」とあり、尚敬王御後絵が現れた現在、背景が全て金箔で埋め尽くされているのを目の当たりにすれば、この「金色燦然」を金箔と読めないこともない。しかし、十八代尚育王御後絵の解説にも「これもまた金色燦然たる美しい御後絵」とあるが、こちらは金雲とその間を埋めるのは金箔散しであり、解説が同じ表現なのは不思議である。

さらに、平川信幸『琉球国王の肖像画「御後絵」とその展開』には鎌倉の調査メモ（鎌倉ノート）も紹介されている。これには、「尚敬王様御後絵」に「国王ノ後ハ金砂子マキ製作ヤ、新シ」とある。「尚貞王様御後絵」には「国王様背後ハ金ハク」とあり、これらの記述を信じていた研究者や復元担当者は「まさか」と驚いただろう。



第13代尚敬王御後絵



第18代尚育王御後絵

この「尚貞王御後絵」も緊急鼎談で話題になった。尚貞王は在位が1669-1709年と40年以上にも亘り、そのため、息子の尚純は王位に就くことなく没した。王位を継いだのは孫の尚益である。王位に就くことはなかったが、尚純の御後絵もあり、やはり、鎌倉が撮影している。「尚純公御後絵」で、尚純は王冠ではなく鉢巻を冠っている。王になれなかった王、息子の尚益によって追尊された御後絵である。

「尚貞王御後絵」は様式的にも興味深い。鎌倉が撮影した御後絵で尚貞の前の王は尚豊であり、ここまでは明の時代であり、その様式で御後絵は描かれている。王の背後には日月の描かれた波の衝立が置かれ、その隙間からは文房具が覗いている。

「尚敬王御後絵」からは清の時代の様式になる。王の背後には何も無い空間、時に金雲が描かれるだけである。従者の大きさも、明の時代の様式と比べるとより小さくなって、視覚的に王の威



第11代尚貞王御後絵 鎌倉芳太郎撮影 『沖縄文化の遺宝』収録



第11代尚貞王御後絵 鎌倉芳太郎撮影  
沖縄県立芸術大学と東京文化財研究所の共同研究により  
ガラス乾板をデジタル化した画像 2024



尚純公御後絵 鎌倉芳太郎撮影 『沖繩文化の遺宝』収録  
他の御後絵と異なり、尚純公は王冠ではなく鉢巻を冠っている

厳を高めているように見える。

「尚貞王御後絵」では、従者の大きさは清の様式であるが、王の背後には衝立がある。しかし、この衝立には何も描かれていない。文房具が覗くような背景もない。前述の通り、鎌倉の調査メモには「尚貞王様御後絵」「製作新シ。国王様背後ハ金ハク。御後絵ノ傑作ニハアラザルカ。」とある。衝立一面が金箔貼りであったということのようだ。

さらに、「尚貞王御後絵」のガラス乾板をデジタル化した画像を見ると、これまで『遺宝』では真っ黒に写っていた尚貞王の衣裳の全面に模様が描かれていたことが明らかになった。

つまり、この「尚貞王御後絵」は明時代の様式から清時代の様式に変わる過程、折衷的な様式ということである。

緊急鼎談の場では、次に見つかるなら、「尚貞王御後絵」が良いねと軽口が飛んだ。

「御後絵ノ傑作」の評価について、鎌倉は『遺宝』においても、「また、数ある御後絵中、この尚貞王像は最も優秀な絵画である」と再度高い評価をくだし、「その執筆者は呉師虔 山口宗季でなければならない」としている。

しかし、上江洲敏夫の家譜調査により、この「尚貞王御後絵」と「尚純公御後絵」の作者は益士仁 宮里里任であったことが1995年に発表されたことを平川が紹介している。

このように記述を考察し、「尚王家家系図」に御後絵の情報を書き込んだ「尚王家家系図と御後絵」を作っていた。

絵師の情報も簡単に調べられる範囲で書き込んだ。ただし、この益士仁 宮里里任については情報が見つからず、後に書くように、平川さんに情報提供をお願いしてある。

「尚王家家系図と御後絵」は、このように新しい情報が入る都度、更新するようにして、「琉球美、造形研究会」HPの「緊急鼎談〈返還された御後絵をめぐる〉」のページに資料として掲載している。

永津禎三「尚王家家系図と御後絵」 私家版 初版 2024年4月18日版  
【更新中】現在は第3版 5月9日版



「尚王家家系図と御後絵」は一覧としての機能を待たせるため、A3用紙1枚にまとめている。そのため、そこに記入できないことも多々ある。その中で、残しておきたい気付きを一つ書いておこう。

それは、尚育王御後絵に対する、鎌倉の評価である。前述のように鎌倉は『遺宝』の解説では尚育王御後絵について「これもまた金色燦然たる美しい御後絵」と述べているが、調査メモ（鎌倉ノート）では、「御後絵中デ拙ナル作ナリ。時代モ新シ。尚円王様御後絵ノ新シ」と酷評である。

当初の佐藤文彦さんへのメールに「特に 第18代尚育王の御後絵が、金箔の多用や、朱と緑青を主体とした強い色彩でありながら実に上品なものであったのに驚きました」と書いたように、15日の報道に接して抱いた私の最初の感想であって、まさにこの出現した御後絵こそお叩などではなく、唯一無二の存在だと直感した画像であった。

この尚育王御後絵を実見したメモで「御後絵中デ拙ナル作ナリ。」と断じたのは何故かと考えてみた。逆に高評価は尚貞王御後絵や尚純公御後絵である。

結論を簡単に言ってしまうと、この実見した時は、鎌倉には尚育王御後絵の良さが分からなかったのだと思う。

時代の価値観もあるだろう。1925年に27歳となる青年の目には、尚育王御後絵の表現は新しすぎた。そして、『遺宝』発行の1982年に近づいた時点で、その「美」に気づくことができたのではないかと。

この尚育王御後絵の画像を見た時の私の印象は先ほど述べた通りだが、やはり、緑青と朱が実に美しく調和していて、これこそが琉球の美だと思った。そして、FBIのYouTube提供の鮮明な画像を見るにあたり、この色彩感覚の素晴らしさ、新鮮さは、どこかで目にしたことがあるという気になった。

それは安次嶺金正である。安次嶺が晩年に自作に上書きした〈仏桑華〉1966→1989年？だ。気付いたら嬉しくなって、プリント1枚のショートエッセイにして、ごく限られた人たちだけに送った。安次嶺の絵も「あんな簡単に描かれた絵」などと誤解を受けやすい。眼力が問われる絵だ。

まさに沖縄の色だ！

2024年3月15日、衝撃的なニュースに出会った。前日の3月14日に米国から流出美術品22点が米国から返還されたというニュースだ。その中で、特に驚きを持って目にしたのは、2点の御後絵だ。鎌倉芳太郎が1920年代に撮影したガラス乾板の白黒写真により、確実に国王の肖像画に間違いのないであろうと思われる、第13代尚敬王御後絵と第18代尚育王御後絵だ。その中でも、私は第18代尚育王御後絵に注目した。その色彩感覚に驚愕した。緑青と朱という強い色同士の組み合わせ、そしてそれを包むのは金箔という濃厚な色遣いでありながら、その圧倒的な上品さに驚愕した。公開された第18代尚育王御後絵を何度も目にするうちに、私の中にある一枚の絵が浮かんできた。安次嶺金正〈仏桑華〉だ。この両者の色遣い、これこそ、まさに沖縄の色だ！



琉球美術品として2024年3月14日に米国から返還された、第18代尚育王御後絵

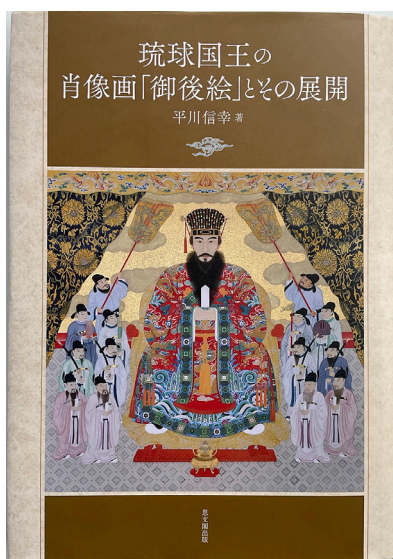
安次嶺金正 仏桑華 1966年→1989年?

(2024年4月8日 永津禎三)

永津禎三「まさに沖縄の色だ！」私教版 2024年4月8日



## 平川信幸さんに会いに行った



平川信幸『琉球国王の肖像画「御後絵」とその展開』が出版されたのは、今年2024年の2月25日である。

その少し前、去年の12月13日に「琉球美、造形研究会」で、沖縄県立博物館・美術館資料である「首里城正殿残欠 (Sa-博3) (Sa-博4)」を熟覧する「見学会」を行ったとき、平川さんの論考「首里城正殿龍柱の美術史的考察」が少し話題になった。『首里城研究 No.25』(2023年3月31日発行)に所収された論考らしいが、私はまだ読んでいなかった。

その時は、ほとんど安里進氏の主張と変わりがないという話だったが、『琉球国王の肖像画「御後絵」とその展開』を入手し、ちらりと目を通しただけだったが、その緻密な論考に感心し、『首里城研究 No.25』を買いに行った。3月中旬だったと思う。

「首里城正殿龍柱の美術史的考察」を読んでみたら、やはり、『琉球国王の肖像画「御後絵」とその展開』と同様、参考文献の重要箇所を丁寧に解説しており、一次資料にあたり難い私のような作家兼研究者にはとても有難い論考だった。

安里氏と異なる見解のように感じた部分があったのと、〈「寸法記は薄い洋紙に原本を丁寧に模写されたものであることがわかっており〉と記述されていたので、このことについてお目にかかり直接意見を伺いたいと思った。

平川さんは、現在沖縄県立博物館・美術館の博物館班に勤めていらっしゃるの、友人の里井洋一館長に紹介して貰えないか頼んでみた。里井館長がすぐに声を掛けてくれたらしく、本人からメールをいただいた。

里井さんが沖縄県立博物館・美術館館長になったというニュースはもう1年以上前の話だが、あの時は本当に驚いた。琉球大学教育学部の同僚で、教授職員会の役員を一緒に勤めたこともあるリベラルな人で、私の定年退職直前には一つの大学院授業と一緒に三名で担当した仲間でもあった。その頃は、自ら数年後の定年退職後の生活設計を自給自足の形にしたいとか、台湾移住も考えていると語っていた。

「復帰50年 平良孝七展」(2022年11月3日～2023年1月15日)での問題を責任放棄して退職した、田名真之前館長

の後任という、「火中の栗を拾う」ようなことを何故するのか、本人には退職後の楽しい計画もあった筈なのに、と思っていた。就任した理由を聞いたこともある。「こんな状況だから引き受けた」と彼は語った。

里井さんとしては、美術館自らの力で再生したいと願う行動したようだが、なかなか機能することなく、この問題は現在、第三者委員会に委ねられている。

このような深刻な状況を作り出しておきながら、責任を放棄して職を投げ出してしまった田名氏とは、私は少々因縁がある。

「首里城復元に向けた技術検討委員会」の副委員長を勤めている田名氏は、首里城正殿大龍柱への委員会対応を批判する意見に対して、〈政治的問題ではなく、学問研究の問題。広く討論して決めるものではない〉と発言したと新聞が報じた（沖縄タイムス 2021年12月20日）。

私は、この発言が事実なら、その考えは健全な美術のあり方を全否定するものであると、田名氏に事実確認を問い、これが事実である場合は沖縄県立博物館・美術館館長の職に不適格であるとして、職を辞すべきと文書で勧告した。しかし、田名氏はこれを無視し、無回答のまま館長職に居座り続けた。

私に言わせれば、「平良孝七展問題」は起こるべくして起きた。決定する権限は全て自分たちにあるという態度で、20年前の名護博物館「復帰30年 平良孝七の世界展」の開催主要メンバーを中心とする人々の意見をクレーマーのように扱い、間違いが指摘されているにもかかわらず、図録を強硬に発行してしまった。まさに〈広く討論して決めるものではない〉という田名イズムが沖縄県立博物館・美術館の現場に浸透していた結果であると思う。

さらに、困難な状況になれば職を放棄するにもかかわらず、沖縄県の首里城復興基金事業監修会議の委員長には居座り続け、首里城正殿龍頭棟飾の制作を巡りここでも問題となる発言をしている。

〈監修会議では、琉球王府時代にはあったが現在は県内では失われた技術もあり、復元には県外の技術の力が必要だとの意見が上がる。ある委員は「壺屋組合をはじめ県内の陶工が県外の技術者と共に制作することで、復元を通して先代が持っていた技術を取り戻し、文化の継承につなげてほしい」と話す〉（沖縄タイムス 2023年4月18日）

この、ある委員とは田名委員長である。龍頭棟飾を作る技術は「琉球王府時代にはあったが現在は県内では失われた技術」でも「県外の技術者と共に制作することで、復元を通して先代が持っていた技術を取り戻す技術でもない。壺屋を貶めるこの発言を自ら発しながら、田名氏は訂正も陳謝もしていない。ただ、県の担当課長が壺屋に対して陳謝したのみである。

このような、間違った内容を意図的に発言する無責任な人物が、未だに県の文化行政の頂上に居座り続ける弊害は計り知れない。

さて、平川さんの話から脱線してしまった。平川さんの首里城に関する見解は、国の「首里城復元に向けた技術検討委員会」と同様の立場なので、私からの、平川さんの論考「首里城正殿龍柱の美術史的考察」について会ってお話したいという申し出に、多少緊張感を持って承諾してくださったのかもしれない。

私としては、研究者の立場で、異なる見解を持つ方とその内容について丁寧に話したいという事だけで、田名氏を批判することは全く異なる、研究上の対話だと思っている。さらに、今回、御後絵が返還され、現在、御後絵研究で最も重要な本を出版されたばかりの平川さんとは、まずはこの御後絵についてお話したいと思っていた。

4月19日に博物館会議室に伺い、初めてお話しした。

「首里城正殿龍柱の美術史的考察」については、「大龍柱の台石が首里城に持ち込まれた時期と階段が末広りの形になった時期の前後関係」と「寸法記は薄い洋紙に原本を丁寧に模写されたものであることがわかっており」の確認だけにして、ほとんどの時間で、御後絵についてのお話を伺った。

前日にまとめた「尚王家系図と御後絵」の一覧をご覧くださいながら、三分割された御後絵の王は、明と清の代わり目で冊封を受けられなかった尚賢王の可能性と、尚豊王の御後絵が上書きされた可能性の二つが考えられるという自説も披露させていただいた。

また、「尚貞王御後絵」と「尚純公御後絵」の作者である益士仁 宮里里任については、私では簡単に調べることができていなかったのので、平川さんに情報を提供いただけませんかお願いした。平川さんは快諾してくださった。

ここでの一番の収穫は、「琉球美、造形研究会」の定例研究会で平川さんに発表いただけないか依頼し、快諾いただいたことである。後日、日程調整を行い、8月25日に発表下さることになった。とても楽しみである。

この小論『「三分割された御後絵」の王は誰か』を書き始めたのは、この定例研究会での資料として使用出来るのではないかと考えたからである。

この時、一番驚いたのは、平川さんがまだ御後絵を見ていないという話だった。御後絵に関しては県の文化財課が全てを仕切っていて、沖縄県立博物館・美術館の誰も見ていないという。

「多分、沖縄の人は、誰も直に見ていないと思いますよ」

沖縄県立博物館・美術館に運び込まれているのに、何も関わらせないようにしているようで、保管・保存の面からも何故、協力し合わないのだろうと不思議で仕方なかった。

平川さんとの面談の後、里井館長にも会った。「尚王家家系図と御後絵」を渡して、平川さんに話したように、次のように自論を述べた。

「三分割された御後絵」は、最初は、第8代尚豊王御後絵に手が加えられたものであるかと思っていた。しかし、第9代尚賢王の在位が1641-1647年と短く、ちょうど、明清交代期にあたり冊封を受けることなく没した王であるため、尚豊王御後絵と同じ構図を踏襲し、烏紗帽を冠った姿で御後絵に描かれたのではないかという推論も成り立つ。どちらも成り立つ推論なので、まだ確定は出来ない。

里井さんは第10代尚質王の可能性もあるかもしれないと述べた。しかし、尚質王の在位は20年に亘る。いくら政情が不安定であったとしても、中国から冊封は受けられたので、死後の姿を表す御後絵に王冠を冠らない姿で描くということはある得ないのではないかと、また、尚豊王御後絵と同じ構図であるという説明がつかないと答えた。

里井さんは、尚恭浦添王子朝良公が、尚豊王の長男であることが分かる方が良いと提案もしてくれた。こちらは、なるほどと思ひ、家系図にやや細い線で繋ぐよう修正し、この図を第1版（4月18日版）としてホームページに掲載した。

## 御後絵の公開が始まった

返還された御後絵などの文化財が一部を除いて4月末以降、報道関係者に公開されるというNHKのwebニュースを4月14日に見つけた。すぐに佐藤文彦さんに伝えた。

佐藤さんから、マスコミ関係への内覧が4月30日に行われる情報を掴んだと連絡があった、NHKのキャスターに同行させて貰えないかお願いしたが、「全国から取材申し込みが殺到したため、各社10分程度の時間制限付きの撮影になり、カメラマンスタッフ以外は入れない」と断られたとのことだった。

妙な対応だなと思った。保管のことを考えるなら、専門家立会いのもと、美術品撮影の専門のカメラマンにしっかりとした撮影をして貰い、これを報道各社に公開すれば良いと思った、多数の各社のカメラマンが単独で慌てて撮影しても、何を写すべきかさえ覚束ないだろう。文化財課の対応には学術的な空気感が皆無なように感じた。



公開された御後絵などの流出文化財の実物を見る関係者ら。右端は身を乗り出して見つめる玉城デニー知事=4月30日、那覇市おもろまちの沖縄県立博物館・美術館

当日のwebニュースを見て、これは知事の政治的セレモニーだったのだと分かった。

御後絵返還に功績のあった高安藤さんに感謝状を渡すのは良いとして、こんなに無防備に御後絵を公開して良いのか。

「尚敬王と尚育王の御後絵は毀損が激しく公開に耐えられないとして2点のみ公開」とあるが、このような簡便な台に乗せていること、マスクも着用せず多数の人が近寄っていること、この後、尚清と思われる御後絵はまた巻き直されて更に痛みが進むのではないかと、このあまりに雑な対応に怒りを禁じ得なかった。



報道では、未だ「三分割された御後絵」の寸法が出てこない。今回、尚清と思われる御後絵が約180cmと報じられたので、そこから寸法を推測するしかない。

ところが、台の高さが違うので、映像から寸法を推測するのが難しい。

しかし、予想していた以上に「三分割された御後絵」は小さいように見えた。もしかすると縦80cm程かもしれない。そうであれば、この「三分割された御後絵」は、お扣であるという可能性が出てくるのではないかと思った。

平川によれば、真境名安興・比嘉朝健の調査報告から、お扣の大（巻物）は高さ三尺（90.9cm）となっている。これが、尚豊王御後絵のお扣の大であれば、鎌倉が撮影した尚豊王御後絵と構図が同じ、従者も一致するのに、王の背後の衝立に描かれた波の形が微妙に異なっているということが説明可能になる。

私は、「尚王家家系図と御後絵」の「三分割された御後絵」のサイズを修正し、尚豊王と尚賢王の御後絵の制作年と作者のデータにお扣の記述を加えて、第2版（5月1日版）としてホームページに掲載し直した。

尚豊王御後絵のお扣の大に、後に手が増えられ、王冠が烏紗帽に描き換えられた可能性が高くなったと思った。



5月8日の沖縄タイムス紙で、「返還文化財16点が8日から県立博物館・美術館で一般公開される。御後絵4点は毀損が激しいため現物は公開しない。原寸大パネルを代わりに展示する」と報じられた。

「三分割された御後絵」の寸法が知りたいが、この展示を見る意味があるのか気になり、前田比呂也さんが入っている研究会の共通LINEで、「御後絵の寸法が知りたいので行かないといけないのかな」と聞いてみた。

前田さんからは、「来たらガッカリしますよ」との返事。それは、新聞報道で予想できる。ただ寸法が知りたいだけ、と思っていたら、佐藤さんがこれから見に行くのと連絡を下さった。

佐藤さんに、「キャプション等で確認できれば良いのですが、寸法表示がない場合は、必要なら係に断って採寸していただければ幸いです」とお願いした。

早速、佐藤さんから写真が送られて来た。こんなパネル展示なので丁寧に「さわらないでください！」と表示まで付いている。幸い、寸法が表示してあった。

縦が109cmもあった。4月30日の写真で推測した大きさより随分大きい。しかし、何か変だ。

よくよく観察してみたら、この「法量」としているのは額付きの寸法なのだと気付いた。おそらくアメリカから送られて来たデータをそのまま載せているのだろう。いくら原寸大パネルだと言っても、それほど正確さは無いだろうから、この表示されている額付きの寸法から推測するしかないと考えた。

それにしても、これらの文化財課の対応は、何なのだろう。全てが情報を見せないようにわざとしているのかと疑いたくなるような杜撰さだ。

気を取り直して、パネルの写真と「法量」から、この「三分割された御後絵」が尚豊王御後絵と同じ構図である場合の寸法を割り出してみた。結果は縦135cm。鎌倉が撮影し採寸した尚豊王御後絵の寸法と同じだった。

これで、お扣の大ではないかという推測は消えた。お扣でなく御後絵そのものであるとするなら、王の背後の衝立に

描かれた波の形が微妙に異なるということが、これは尚豊王御後絵ではないということをかかなりの確率で示している。つまり、尚賢王御後絵であるという可能性が一番高くなったことになる。

佐藤さんは同じメールでもう一つ情報を知らせて下さっていた。

8日のNHK 沖縄夕方のニュースで、返還された御後絵の特集があり、4月30日の報道機関への公開の話題を改めて伝えながら、田名真之氏への取材を報じていたことだ。「琉球の歴史や中国との関係に詳しい田名真之さんに分析を依頼しました」と断ったのち、「三分割された御後絵」について、ニュースはこう報じていた。

【ナレーター】 一方、三分割された「国王不明の御後絵」に描かれた人物は誰なのか。注目したのが頭です。見つかった他の御後絵の王は「玉冠」をつけているのに対して、この人物は玉冠をつけていません。その背景には中国との関係があると田名さんは指摘します。当時は、中国皇帝から「冊封」を受け、対外的に国王と認められて初めて玉冠を身につけられました。三分割の御後絵の人物が冠っているのは玉冠ではなく「烏紗帽」という黒い帽子です。

【田名】 たぶんですけど、私の解釈は、烏紗帽を冠っているのは、王様になったけど冊封を受け損ねた人

【ナレーター】 襟の特徴などからは、明の時代に在位したとみられます。これらの条件に当てはまる王は…

【田名】 たぶん尚賢で問題ないだろうなど私は思っています。明の時代から清の時代に代わるという大混乱の時代の王様ですね。王様で冠を冠れなかった人は、そんなにいる訳じゃない。琉球の王であったのは確実なので、御後絵としては王様スタイルでちゃんと描いたけれども、さすがに、玉の冠というか。そこまでは描かなかったというふうに解釈した方がいいだろうなど私は思っている。

同じ結論になったことを、なぜか喜べない、釈然としない気持ちが残った。

## 謎はまだ続く

この釈然としない原因は何だろうと、暫くひっかかっていた。それは、田名氏が「玉冠ではなく烏紗帽を冠っていること」だけを根拠に推測しているからではないかと思った。「三分割された御後絵」としてモノが目の前（私は映像でしか見れないが）にあるのに、そのモノが語る部分を殆ど無視していることだ。

烏紗帽の形は硬く感じられる。顔の部分は剥がれているというよりは消されているように見える。首の繋がり方も不自然に見える。波の上にある扇の位置が少し低い。要するに、かなりの手が後から入ったと思われる痕跡があり、総じて不自然であるということ。田名氏の見解には、画の状態として訴えてくることが殆ど考慮されていないということだ。

私は琉球新報はweb版でしか購入していないので、どうしても沖縄タイムスの方を見てしまう。そこで、もう一度琉球新報のweb版の画像を検索し直してみることにした。

すると、4月30日の内覧当日ではなく翌日5月1日の写真に興味深い1枚を見つけた。

この写真では、首の位置で真横に切断され、繋ぎ直されているように見える。

波の上から二段目のところも、同様に切断され繋ぎ直されているようにも見える。

これは、どういう意味なのだろうか。

「緊急鼎談」で話題になったように、これが尚賢王御後絵とすれば、従者は尚豊王御後絵と全く同一に描いたことに



なる。在位期間が6年間ほどであっても、多少の人事の入れ替えがあったと考えた方が自然だ。とすれば、次のような推論も成り立つのではないかと思いついた。

この「三分割された御後絵」は2枚の御後絵が繋ぎ合わされて出来ているのではないか。

左右の従者が描かれた2枚は尚豊王御後絵。

この真ん中の軸に仕立てられている首から下の部分は尚豊王御後絵から、首の部分は尚賢王御後絵から、扇の形は尚豊王御後絵と同じだが、扇自体の表情は微妙に異なるので、どちらかは判然としないが、切断され繋がれ、やや短くなっている。

このように推論してみた。今後、調査ではっきりと切断や繋ぎが確認できれば、この推論は、鎌倉の撮影した写真と比較した数々の矛盾を解消できる説になると思う。

まだまだ、謎は続いている。これから新しい情報が入るたびに、このような推論を重ねていくのは実に楽しいことではないか。今回は、最もミステリアスな〈「三分割された御後絵」の王は誰か〉を中心に考えてみた。

### ここで、この小論は終わる筈だった

ここで、この小論は終わる予定だった。ところが、衝撃的な報道写真を見てしまった。これは気を取り直して書かねばならなくなった。これが、その写真だ。



「御後絵」の修復方法を検討する「返還文化財保存修復検討委員会」の第1回会合が5月23日、那覇市の県立博物館・美術館であったとする報道写真だ。

この写真は琉球新報のものである。前述のように、私は紙面では沖縄タイムスしか取っていないので、初めはそちらを見ていた。

沖縄タイムス記事の写真は、尚清のものと思われる御後絵が4月30日と同様な取り扱いで閲覧されており、相変わらず乱暴に扱われているなど心を痛めていた。

あまり、詳細には読んでいなかったが、「特に第13代尚敬王と第18代尚育王の御後絵は傷みがひどく、絵画を巻かずに広げて保管することも決めた」と記事にあり、「それは当然のこと、だが、尚清と思われる御後絵は相変わらず乱暴に扱われるのか」と思っていたくらいだった。

ところが、数日後に、琉球新報のweb版を見直している時に、この写真を見た。あまりの衝撃に言葉を失った。

尚敬王御後絵も尚清と思われる御後絵と同じ扱いではないか。

そして、沖縄タイムスの写真からはアングルが違って分らなかったことだが、もしかしたら、この部屋は「美術館実習室」ではないか。

「絵画を巻かずに広げて保管することも決めた」と沖縄タイムスには報じられていたが、この場所でこの状態で広げたままなのか。「実習室」だとすれば、そこは沖縄県立博物館・美術館の中で最も外部に近い部屋だ、屋外に出るための扉がある部屋もある。保管に適した部屋とは全く思えない。

「絵画を巻かずに広げて保管」するのは、例えば保管箱を事前に作っておくなど、この委員会前に当然準備しておくべきことだった筈だ。このような状態で広げてしまったら、保管箱が出来上がるまでの長期間、「実習室」を閉鎖しなければならないことになるが、こんな場所でそうしているのか。

最悪、「絵画を巻かずに広げて保管することも決めた」のは、次回からということで、既に巻き戻されてしまったのか。そんなことをしてしまったら、絵具の剥離、紙の繊維の断裂など、既にかかなりのダメージがあるだろう。

本当に、考えられない対応であると思った。すぐに質問の文書を用意して、6月1日付で文化財課課長と博物館・美術館館長宛で送付した。

返還された御後絵の保管・保存について【6月1日付】



この質問の文書に対しては、6月10日付の回答を受け取った。しかし残念ながら、その内容は肝心な部分を誤魔化すような内容であった。また、質問の形は取っていないが、「御後絵」の返還にあたり、この貴重な文化財をどう守っていくのか、組織の壁を越えて、一致協力体制のもと職務の遂行を行って欲しい旨を記していたが、その趣旨を無視し、質問項目のみに回答を行うという、極めて事務的な対応でしかなかった。

返還された御後絵の保管・保存についての【質問】に対する回答状【6月10日付】



そのため、再質問の文書を6月13日付で送付した。

それから2週間以上経過したが、何の返信も無い。



返還された御後絵の保管・保存について（再質問）【6月13日付】

あってはならないことだが、「大龍柱問題」など、県のこれまでの対応を思い起こせば、文書への回答などが引き伸ばされ、時に無視されることもあるかもしれない。

この小論は、当初、題目にもあるように、「三分割された御後絵」の王は誰かを中心にした考察のみで終える筈だった。しかし、「返還文化財保存修復検討委員会」の5月23日第1回会合を報じる琉球新報の記事写真を見て、事情が大きく変わってしまった。

この小論を一旦6月7日臨時発行し、6月1日付の文化財課課長と博物館・美術館館長宛文書も掲載したのは、私が提出したこの質問文書への回答などの対応等、次の展開を追い、暫くは書き続けなければならないと思ったからだ。

しかし、残念なことに、6月10日付回答文書を見る限り、県の姿勢には、これを真摯に受け止め対処しようとするより、これまで何度も繰り返してきた如く、あたかも問題が存在しないかのように振る舞う隠蔽の体質が垣間見えた。

望むものではないが、この問題については、これから時間をかけてゆっくりと県の姿勢を糾していかなければならないことになりそうである。

この小論はもともと、8月25日に開催予定の、「琉球美、造形研究会」第17回定例研究会のための準備資料である。「御後絵」の保管に関わる質問文書や、これへの回答など、今後も続くであろうやりとりは、改めて別稿として纏めることにし、「未完」として臨時発行していたこの小論は、この改訂版をもってひとまず完了とする。

### 「三分割された御後絵」の王は誰か

著者：永津禎三

私家版

2024年6月7日臨時発行（未完）

2024年6月30日改訂版発行